
ご注文をどうぞ。

杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご注文をどうぞ。

【Nコード】

N9075Y

【作者名】

杏

【あらすじ】

本人曰く、悠々自適のフリーター生活を送っていた。あの時アレを拾わなければ……。だるがりの主人公が綴る、ありそうだけどありえない生活記録。

プロローグ（前書き）

小説初心者ですが、暴走したいんです。

※未来編後の設定です

プロローグ

「はい、今日もお疲れした〜」

今日も定時に上がる。つい最近までバイト終わりに眺めていた夕日も、ここ数日ですっかり拝めなくなった。どこかで鳴いていた虫も、いつの間にか種類が変わっている。

そんな事を考えながら、店の裏に停めてある自転車を取りに歩いていた。いつもと同じ風景の中、いつもと同じ行動をとる。

この後、余計な事に首を突っ込まなければ、明日もいつもと変わらず過ごせたらうに。其れが必然だったとしてもだ。

首を突っ込まない……。この日、以後気を付けるべき課題が増えた。

これは私、「世良 凜」が、ある日街で拾った「猛獣」との日々を綴った記録である。

———高校卒業後の一年間は自由にフリーター生活を送る、という、私の計画を台無しにしてくれた猛獣との遭遇から書き始めようか。

プロローグ（後書き）

ラブコメを目指したいんですが……。
読者様からのご注文、お聞かせください。

P. 1 義弟

PM 6..30

若干の肌寒さと、けだるさを感じながら、自転車を取りに店の裏側へと歩いて行く。

「て、てめえ、ふざけんじゃねーぞ」

「中坊のくせに……」

「……次会ったらただじゃおかねーからな！」

定番の捨て台詞を吐いた高校生らしき男、三人発見。すぐさま引き返す。

——うわー、店の裏で喧嘩かよ。

するならもっと別の場所ですてくれればいいのに。店の評判がさがっ

「群れてる奴は何人たりとも……、咬み殺す」

——こ、この言葉は、ひばりん？ ひばりんのコスプレした奴が一人紛れてたよ。

おまけにケンカとか……なりきりすぎ……力入れすぎ……。

三人の不良と一人のコスプレイヤーが気になり、少しだけ覗いてみることにした。

「ちょっと、そこの君たち！ 街中で喧嘩とは頂けないな。どこの学校の生徒？」

誰かが呼んだのか、騒ぎが大き過ぎたのか、警察沙汰になってし

まった。警官はひばりんコスプレの少年に話し掛けている。

「並盛中」

コスプレ少年が答えた。

この威圧感といい、警察相手でもキャラを崩さない姿勢といい、ものまねグランプリに出場したら優勝確実なのではないだろうか。

「並盛中……聞いた事がないな。他県の生徒？」

「東京都にある並盛中だよ」

「ちよっと君、ふざけるのも大概に……」

何と言えいいのだろうか、背筋が凍るとはこの事か？ 警官も立ちすくんでいる。

恐る恐るコスプレチャンピオンを覗き見ると、驚く程良く似ている。雲雀恭弥が現実存在するならば、きっとこの容姿だろう。

………チャンピオンの右拳が紫色に光っている。

………まさか、まさかね。

「君もここで咬み殺してあげるよ」

「……っ！」

口だけをニヤリと動かす。

警官が声にならない叫びを上げた途端、紫色の光、いや炎が、彼愛用のトンファーに灯る。

「あのっ!!」

「!?」

「その子私の弟なんです！ 厳しく注意しておくので今回は勘弁して下さい！」

警官はコクコクと頷くと、一目散に走り去った。それと同時に、私は地べたに座り込む。

「君、だれ？」

「私の弟ってどういう意味？」

「ちよつと、聞いてるの？」

はっとして顔を上げた。すると、私と少し距離をとった位置に……

彼がいた。

「ごっ……ごめんなさい！ 余計な事をして！」

「君には一つ借りが出来てしまったよ」

「え……………あの、雲雀……………恭弥さん？」

「何？」

——やばい、本物か？ 本物なのか？

いやいやいやいや、ただのチャンピオンじゃね？ 世界に通用するくらいそっくりなチャンピオンじゃね？ さすがに漫画から飛び出して来ちゃうってのはファンタ

「だから、何？」

少し苛立った様子で口を動かしている。この場合、話し掛けられているのは私か？ 私なのか？

「あの……………なんでここに居るんですか……………？」

——あゝ！ 核心を突いてしまったよ！

彼は先程とは違う表情を見せた。無表情というか、ぽかんとしたというか。

「……………わからない」

P. 2 誘惑

「……わからない」

——わからないって……。なんかデジャウ。未来編っぽいなく。
………っっていうかまだ本物って決まっていんじゃないじゃ!? 世界チ
ヤンピオンって可能性も十分あ

「君、なんで僕の名前知ってるの?」

「それは……あのっ、そのお」

「訳が分からないから君も、咬み殺してしまおうか」

ありえない言葉を彼が吐いた途端、私の口も動き出した。

「並風紀委員長!

誕生日はこどもの日!

着うたが並中学校歌!

並盛を愛してる!

実は小動物が大好き!

ナッポーが大嫌い!

ハア、ハア……あとは………」

——あ、あとは何があったか……。何か言わないと………」

「最後の方は良く分からないけど、君は僕の事知ってるの?」

「あ、はい。一応」

「なんで?」

——なんでって……これ言っているのか？　てか周りが騒がしいな。

「見て見てっ！　あの人リボーンの雲雀さんにそっくりじゃない？」
「えっマジ？　うっわ、すげー似てんじゃないん写メとく？」

中学生と思しき二人組が、店の表側から携帯をこちらに向けている。

——こんな時間に中坊が出歩いてるんじゃないよ……って……。
やばい、ひばりんがすごい殺気立ってるんですけど……。
このままだと最悪あれがぁーして、こーなってしまうかもしれない。

——あ~~~~、もおっ！！

「とりあえず、ここは人が多いし私の住んでるアパート行きません？」

恐る恐る聞いてみる。

ってかこれって誘ってるみたいになってる？　最近彼氏いないけ

どき、そういう意味じゃないよ！　けしてそ

「うん」

そんなこんなで、結局私の家に向かう事になってしまいました。

向かう途中、私は自転車の後ろに座り、彼の背中を眺めながら放心状態。アパートへの道を知らない彼が、私に問いかけても上の空。

だいぶ時計の針も位置を変えた頃、無事帰宅したのであります。
こうして私は、猛獣を家の中へ招き入れてしまったのであります。

※どうして二ケツしてたんだ。記憶にない。
読者様のご想像にお任せ致します。
とか生意気書いてみる。

P. 3 参照

PM 9..15 事情聴取開始

ROUND 1

「お名前は雲雀恭弥さんで間違いありませんか？」
「うん」

「年齢は？」

「●才」

「えっ、そうなの！？ 私はてっきり●才だと思っ
「次」

「うっ、あゝゴホン。住所は？」

「並盛町●●●●」

「一軒家ですか？ それともマンション？ それか学

「●●●●」

「まじか、それは意外だな。イメージ的には●●●●の方が合っ
て」

「次」

「家族構成は？」

「●●●●●●●●●●」

「……やばい、これはみんなに公開しなければ。まさかひばりんの家」

「次」

「身長、体重は？」

「知らない」

「77には169cm58kgって書いてあるんだけどなあ」

「？　じゃあそれでいいよ」

「血液型は？」

「忘れた」

「うん！　そーくると思ったぜ！　ハルハルインタビューでも謎だったし、まさかの77でも謎だったからね！　どんだけ謎に包まれてるんだってね！　謎に包まれてるってゆーとフルーティーな果実の星の王子と若干キャラかぶってるよね！　あっそうそう、血液型はさー。んー、私的にはB型がいいと思うんだ。私がB型の人が好きってのもあるんだけど、何ものにもとらわれることなく、独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮雲ってチェルベツロも言ってるし、あっこれは14巻参照ね。てかこれって結局優柔不断なマイペース人間ってことじゃない？　ってことは私を含めるB型人に当てはまると思うんだよね。それにひばりんって……」

「……………ハア」

「んっ、ゴホンゴホン」

※ここら辺でいつものむっすりした顔から呆れて物も言えませんな顔に変わる。

まあ、ROUND1はひばりんのKO勝ちってことにしとくか。

P. 3 参照（後書き）

14 卷…ハルのハルハルインタビュー第十一回

14 卷…標的 119

V o n g o l a 7 7 … P . 0 5 6

参照です

協力…R 氏

P. 4 有無

ROUND 2

「この街に来るまで何処に居ましたか？」

「並中の屋上」

「えっ、あの時間に？」

「うん」

※何か問題でもある？ みたいな顔をされる。

「いえ、そこで何をしていましたか？」

「寝てたよ」

「この街に来た瞬間の事を話して下さい」

「寝てたよ」

「うん、それは知ってるんだけどさ。

なんかビリッときたとか、目の前が真っ白になったとか、そーゆーのが漫画とかだとあるよね」

「寝てたよ」

「……………はい。」

この街に来た時、最初は何処に居ましたか？」

「ベンチの上」

「それは何処の？」

「君と会ったところ」

「ああ、店の裏のね。来た直後は何をしていたのか教えて下さい」
「……寝てたよ」

「うん、予想はしてたけどね。『……』があつたのはちょっと予想外かな。有無を言わず答えるのかと思ったら、少し考えてくれたんだね。やっぱり君、ただの不良じゃないね。流石だわ」

「……………」

※少し睨まれたような気がした。

「その後、あの高校生達をシメたと」

「まあね」

「そこに私が現れたと」

「うん。しばらくコソコソしてたね、君」

※隠れて見ていた事がばれていたようだ。

「えっ？ 私そんな事してないよ？ あはははは……やだなく、もう……」

「……。それでいいよ」

※流石に古典的過ぎたようだ。

「…………ごめんなさい」

「うん」

※ひばりんがただの不良じゃないって分かった。いい子だ、あの子。
ROUND 2はひばりんの一発KO勝ち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9075y/>

ご注文をどうぞ。

2011年12月5日21時54分発行